

ことばだより



イラスト：わたなべ さちよ

目次

巻頭随筆 消費としての読書から生産としての読書へ……田近洵一 2

国語

特集 子どもの読書と読書活動を取り巻く現状……土居安子 3

読みたい本に出会える学校図書館……中山美由紀 6

読みあい学習の実践……村中李衣 8

書写

一年生における書字活動と文字環境の大切さ……多田三津子 12

資料室……14

消費としての読書から生産としての読書へ

——「読むこと」の学習の改革のために

田近洵一
東京学芸大学名誉教授
元早稲田大学教授



「消費としての読書から生産としての読書へ」というのは、消費としての読書は価値のない無駄な読書で、そこから抜け出して価値の高い情報生産的な読書に向かうべきだということではない。むしろ豊かな消費としての読書が、生産としての読書の土台だということである。すなわち、疎かにしてならないのは豊かな消費としての読書だということだ。

消費としての読書とは、何かを知りたいとか楽しみたいといった、生活的・文化的な欲求から本を求める読みである。それは、読むこと自体の楽しさを求めている読みであり、言うならば実利的には無用の読書である。それに対して、生産的な読書とは、必要から本を手にする情報生産の読みである。それは、解決すべき課題を前提とした役に立つ読書、言うならば実利的に有用の読書である。読むという行為は、興味・関心に支えられ、さらに、目的・必要を追って展開する。たとえば、生産としての情報読書であっても、その基礎に読むことに対する興味・関心がなければならぬ。

人間にとって、消費とは、決して無駄な使い捨てではない。その本質は、外なる資材をわが内に取り入れ、自らの存在を確かなものにしていくところにある。外なる世界と出会うには、出会いへの興味・関心がなければならぬ。つまりは、何かを読みたいという読書への興味・関心が耕されている必要がある。楽しさを求める消費としての読書は、読書を求める心がなければ始まらないのである。

今日、自分から本を手に取りうとしない、いわゆる「不読者」が増えていくといわれるが、それは、現代人が消費としての読書をしなくなったということを意味していよう。私たちは、まず、子どもの不読

者を少なくすることを考えなければならない。

放っておいても本を読む子どもがいる。その一部の読書好きの子どもは、読書の楽しさを知っているのである。ところが、読書の楽しさを知らない子どもたちが多いのが現実である。その子どもたちには、読むことのおもしろさを体験させてやらなければならない。

「読書活動の充実」を標榜する学校での読書が、実は読むことのおもしろさの体験を阻害しているという現実も目にするところである。読書の時間を設定すれば、読書の楽しさを体験させることができるというものでもないのだ。読むことのおもしろさも体験させずに、ただ読書量を競わせるような読書指導は、かえって楽しさを求める豊かな消費としての読書をスポイルしてしまうということも知るべきである。

読むことのおもしろさの体験の成立——国語科は、その観点から読むことの指導の改革を図らなければならない。読むことの学習は、おもしろくなければならぬのだ。国語科で読むことのおもしろさをスポイルしておいて、その外で子どもに読書を強いるのはまちがいだということを経験しておかなければならない。

たちか じゅんいち 一九三三年生まれ。
長崎県出身。川崎市、東京都で小・中・高の教壇に立つ。東京学芸大学教授、早稲田大学教授を歴任。編著書に『戦後国語教育問題史』（大修館書店）、『国語教育指導用語辞典 第四版』（共編、教育出版）などがある。

子どもの読書と読書活動を取り巻く現状



財団法人 大阪国際
児童文学館主任専門員

土居安子
どいやすこ

絵本や児童文学作品の物語世界を体験する、物語体験ワークショップを実践・研究している。また、子ども向け図書館検索システム「ほんナビきつず」の開発や、教員・司書・ボランティアなどに対する読書活動に関わる研修の企画を行っている。

子どもは本を読んでいるか

近年の子どもの読書に関する調査を概観すると、全国学校図書館協議会と毎日新聞の「第五十八回学校読書調査」（平成二十四年五月）では、小学生の月間平均読書冊数は一〇・五冊、中学生四・二冊、高校生一・六冊で、一か月に一冊も本を読まなかった割合は、小学生四・五％、中学生一六・四％、高校生五三・二％である。

月間平均読書冊数は、小・中学生ではおしなべて過去五年間で増加の傾向があり、高校生では、横ばいか減少の傾向にある。

一方、平成二十四年度「全国学力・学習状況調査」（小学六年生対象）では、読書が好き

かという質問に対し、約七三％が好き、またはどちらかといえば好きと答えており、十九年度調査から微増している。

文科省の平成二十二年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果では、全校一斉読書を行っている学校は小学校で約九六％、中学校で約八七％、高等学校で約四一％である。

これらの数字から、特に小学生では本をよく読んでいるということができるが、数字を重ねて読んでみると、小学生においては、ほとんどの児童が学校で本を読む時間を与えられ、約七割の児童は読書を楽しんでいるが、残りは苦痛を感じている可能性もあるということがわかる。

また、中学校でも全校一斉読書が増えているために、本を読まない生徒は減っているが、高校になって一斉読書の割合が減ると、本を読まない生徒が半分以上を超えているという結果は、年齢が上がるにつれて本を自ら読む生徒が減っているという読み取ることができる。

一方、数字からは読み取れないが、読む子と読まない子の格差が広がっており、小学二・三年生頃の絵本から読み物への移行ができないことなどが、問題として指摘されている。

それでは、子どもたちは実際にどんな本を読んでいるのか。

「第五十八回学校読書調査」を参考にすると、いくつかの傾向が読み取れる。一つはメディア・ミックス展開である。「ハリー・ポッター」（J・K・ローリング、静山社）、『謎解きはディナーのあとで』（東川篤哉、小学館）、『僕等がいた』（高瀬ゆのか、小学館）など、映画化、テレビドラマ化、アニメーション化、マンガの小説化などの作品が見られる。また、中学生では、ケータイ小説から始まり、マンガ化、映画化されている『王様ゲーム』（金沢伸明、双葉社）が圧倒的人気を獲得している。

二つめに、小学生では「かいけつゾロリ」（原ゆたか、ポプラ社）が四、六年生までに人気であり、ホームズなどの推理もの、「怪談レズラン」（童心社）などの妖怪ものに人気がある。いわゆる読みやすさ、謎解きの要素が大きく関わっていると思われるが、「かいけつゾロリ」しか読まない子どもへ、読書をどう広げていくかは教員からよく相談を受ける。

読書活動に関わる学校や地域での活動

課題を抱えながらも多くの小・中学生が本を読む機会を得ているのは、国の読書活動への積極的な関わりと無関係ではない。過去十年間で子どもの読書環境や活動に大きな変化

が見られる。

(1) 国や地方公共団体の施策

国は、子どもや大人の活字離れへの危惧から、「子どもの読書活動の推進に関する法律」のもと、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（文部科学省二〇〇二年八月）を策定し、加えて「文字・活字文化振興法」（二〇〇五年七月）を施行、二〇〇八年三月には第二次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を策定している。これらの動きを受けて、都道府県単位、市町村単位でも、子どもの読書活動のための推進会議が作られ、独自の推進計画、実施計画が策定されている。

(2) ボランティア活動の広がり

その中で最も活動が広がったのは、前述した全校一斉読書と、ボランティア活動である。「学校図書館の現状に関する調査」でも、約八割の小学校で読書活動に関するボランティアが関わっていると報告されている。

ボランティア活動として最も多いのは、教室で絵本を読んだり、お話を語ったりする、いわゆる「おはなしボランティア」活動である。ボランティアの中には、これまで自宅を開放して本を貸し出すなどの家庭文庫・地域文庫活動を行って子どもの本に精通している人たちも参加しているが、PTA活動の延長や依頼されてしかたなく参加している人たちも

多く、本の選び方、読み方などの基本的な研修を受けていない人たちも多い。また、ボランティアの中には、じつくり楽しむ絵本より、すぐに理解できて盛り上がる絵本を好む人も多く、そのニーズに応えるべく、視覚的なインパクトが強く、だじやれなどの単純な笑いを誘う絵本が多く出版されているという現象も起こっている。

学校図書館の整備を行っているボランティアも少なくない。一九九七年の「学校図書館法」改正にともない、十二学級以上の学校に司書教諭の配置が義務づけられたものの、ほとんどの学校で司書教諭は学級担任などの兼任であり、学校図書館の整備を行うのが困難な状況にある。そんな中、ボランティアが関わることで、書架の整理や、長時間の開館が可能になっているが、一方で、ボランティアが関わることの課題や限界も指摘されている。

最大の課題は、学校図書館の機能の一つである学習センターとしての役割が果たせないことである。学習センターとして機能するためには、学校図書館に関わるスタッフが、カリキュラムを理解し、授業を行う教員と打ち合わせをしながら資料を集め、提供し、その使い方について指導・助言を行うことが必要であるが、ボランティアにそこまでの役割を求めることはできない。

また、学校図書館の蔵書を構成するうえでは、地域性・学校の教育目標・子どもの実態を把握しつつ、長期的視野に立った選書を行うことが必要であるが、これもボランティア活動として行うことは不可能である。加えて、貸し出しに関わる児童・生徒のプライバシーの問題もあげられる。

(3) 学校図書館スタッフの増加

これらの課題を解決するために、現在、多くの市町村で、学校司書や学校図書館支援員などと呼ばれる学校図書館を運営するスタッフが雇用されている。これは、平成二十四年度に約百五十億円の地方財政措置がされたことが大きく影響し、これにより、これまでの古い本しかない鍵のかかったところという学校図書館のイメージが、児童・生徒が利用できる図書館というイメージへと大きく変身を遂げている。

しかしながら、ほとんどの職員が非常勤であり、一週間に二校以上を兼務しなければならなかったり、勤務時間が短かったり、司書の資格を問わない、研修制度が確立していないなど、課題も多い。

(4) 公共図書館との連携

市町村で子どもの読書活動推進計画が策定される中で、学校図書館と公共図書館の連携も少しずつ広がり、「学校図書館の現状に関する

る調査」では、小学校で約七四%、中学校で約四五%の割合で連携がなされ、二年前よりそれぞれ五ポイント、九ポイント増加している。

連携のかたちとして最も多いのは、公共図書館から学校図書館への団体貸出であるが、インターネットで予約できるか、配送便が整備されているか、学校図書館側に担当のスタッフがいるかなどの条件で、使われる頻度や内容が大きく異なる。

それ以外には、図書館見学や公共図書館司書の学校訪問、公共図書館からのブックリストや重複本の提供などがあげられる。

公共図書館の一方的な学校図書館支援ではなく、「連携」となるためには、お互いのニーズや目的を共有し、地域で子どもの読書活動のありようを考えるための定期的な連絡会議を行うことが重要である。

環境を整え、目的をもった活動を

学校で最も多く行われている読書活動である全校一斉読書は、児童・生徒に読書する時間を保証する。この時間を充実させるためには、児童・生徒が本を楽しむための環境を整える必要がある。

まずは、学校図書館に読みたいと思えるような本があること、それらの本を子どもに手渡す学校司書のような「人」がいること、公

共図書館と連携して、児童・生徒が読みたい本を予約でき、取り寄せられることが重要である。

また、ボランティアグループや公共図書館の司書が、本の楽しさを知るために、さまざまな本を読んだり、紹介したりする体制を整えることも環境の充実につながる。

教室では、教師自らが子どもに本を読んだり、紹介したりするなど、日常の地道な活動の中で、教師の本に対する評価や読書観を示していくことが重要である。

それによって、同じ傾向の本しか読まない児童・生徒が新たなジャンルを開拓することができたり、読むことが困難な児童が、教師に読んでもらった本を自分で読んでみることで、読むようになったりすることが考えられる。

本の冊数を競ったり、本の紹介や読む活動をゲームとして行ったりする活動が行われているが、その活動によって、児童・生徒がどんな本の楽しみ方を知り、読書に対してどんな考えをもち、それらをクラス内でいかに共有するかを、指導者が意識して行うことが必要であると感じている。

読書活動に広がりをもたせること

一方で、読書活動に広がりをもたせること

も考えられる。

本や活字を見るだけで嫌悪感を抱く児童・生徒には、視覚的イメージや映像を見て言葉を紡いでいくことによって、読む楽しさを伝えるアプローチが考えられる。

また、インターネットや電子端末が発達し、多くの情報量を読みとばす読み方が自然と身についてしまう状況において、書かれている内容を理解し、心の中で対話しながらじっくり読むという読み方を、読書会などをとおして体験する活動も考えられる。読書会は、深いテーマをもった一冊の本を丁寧に読む活動だけでなく、マンガに似た文体をもつ「ゾロリ」や誇張されたキャラクター、パターン化されたストーリー展開のライトノベルのおもしろさを徹底的に語り合う活動や、メディア・ミックス展開で出版されている本・映画・マンガを比較する活動も考えられる。

児童・生徒がこれらの活動をとおして、自らの読書に自覚的になり、他者の読書に対する考えを知り、メディアの特性や読者へのアピールの手法に気づくことができれば、自発的な読書への一歩となりうるのではないだろうか。

読みたい時に読みたい本に出会えるという読書環境を整えると同時に、読書とは何かを考えることのできる読書活動を期待する。

読みたい本に出会える学校図書館 ― 図書館は「ひろば」 ―



東京学芸大学附属
小金井小学校司書

なかやま みゆき
中山美由紀

東京都出身。鶴見大学非常勤講師。共著に『鍛えよう！読むチカラ 学校図書館で育てる25の方法』や『シリーズ学校図書館学第三巻 学習指導と学校図書館』が、論文に「学校図書館における情報リテラシー育成の意義と課題」などがある。

図書館は出会う「ひろば」

東京都武蔵野市にある市立図書館の一つに、二〇一一年に開館した「武蔵野プレイス」がある。十年前の二〇〇一年には、宮城県仙台市に「せんだいメディアテーク」という図書館が誕生している。一階にカフェがあり、館内全体にコピーの匂いが漂い、食器の音が響く。もはやどちらにも「図書館」という名称がないのは、従来の図書館機能だけでなく、グループワーク・研究会・展示発表など、住民のさまざまな活動や交流に関して、情報にアクセスできる「知の拠点」として援助しているからにほかならない。

学校図書館もまた、学校において校内全体の教育活動を支える「知の拠点」として、読書を含め、子どもたちのさまざまな知の営みとそれを分かち合う出会いのある「ひろば」でありたいと思う。いくつかの実践を紹介しながら、子どもたちの読書生活と学校図書館の活用について述べてみたい。

魅力あるコレクション

東京学芸大学附属小金井小学校の「なでしこ図書館」は、約二万冊を所蔵し、週に一回の図書館優先利用時間——いわゆる「図書的时间」があり、全学年・学級が利用している。教員からの授業をつくるうえで、本や資料の問い合わせも多い。年度初めには、どの学年にも図書館利用のオリエンテーションを設ける。「図書の時間」の基本は、読み聞かせや図書の案内を担当教諭と司書で行い、本の貸し出しをして、自由読書をする。必要があれば、授業に関連した本を紹介したり、図鑑や百科事典というような参考図書（調べるための本）の使い方や日本十進分類法を教えたりしている。

大事なことは、毎週やってくる子どもにとっ

ても、授業をつくる教員にとっても、「魅力ある本がそこに並んでいる」ということである。選書は絵本や文学だけに偏らないようにし、子どもたちの学びを深める本、世界を広げる本を児童書に限らず購入している。読み物も、小学校図書館では手薄になりがちな、高学年向けの本・海外児童文学・ノンフィクションにも目配りをして、さまざまな分野、さまざまなジャンルの本が並ぶように購入している。子どもたちが楽しく読み、更に読む力をつけ、教員の読書生活と授業をサポートできる魅力ある本をそろえていくことが、学校図書館には必要である。ときには、公共図書館から団体貸出を受け、書籍の充実が必要なものもあるが、大切なことは、学校図書館が館外も含めた学校全体の読書環境を図ることである。また、図書館自体の空間は、全校の子どもが行き交う「知のひろば」として価値がある。そこにある魅力的な本によって、子どもたちは物語やノンフィクションの登場人物や未知の事柄と出会い、その本を世に送り出した著者とも出会い、更には学年や学級を越えて、ともに本を読む仲間と出会うのである。

読んで、制作して、展示しよう！

学校図書館において最もよくきかれる質問

は、「おもしろい本はないですか。」である。その質問がくると、最近読んでよかったと思う本をいくつかあげてもらって、その子の傾向を確かめてから、推薦するようにしている。しかし、子どもたちは、学年が上がるにつれて、大人よりも友だちの推薦を好むようになるので、館内にお薦めを展示して情報交換できるようにする。

教科書では、五年生の読書単元で扱う読書新聞・ポップ・本の帯・ポスターなどの作成は、他の学年や委員会活動でもできる。それらは常に館内に展示・掲示すれば、他の学年に見てもらうことができる。

学校での読み聞かせでは、どんどん発言してもらおう。好きな場面や印象に残ったところをあげて理由を述べ、「それを聞いてどう思うか。」などと交流する機会をつくる。

低学年では、『みかんのひみつ』（岩間史郎写真、ひさかたチャイルド）の読み聞かせ後に、みかんの輪切りの絵を色鉛筆で描き、吹き出しに印象に残ったところ、理解したところを「みかんじまん」として書いた。それを館内に掲示した。また、自分の嫌いな野菜の絵をクレヨンで描いてから、『ぜったいたべないからね』（ローレンスチャイルド著、木坂涼訳、フレーベル館）を読み聞かせし、嫌いな野菜に新しい名前と由来をつけ、説明を

書いて展示した。（本校酒井由美子司書実践）
学校図書館を読んだ自分を表現して、交流を図る空間にするのである。読書の質は、子どもの育ちを想定して集めた館内の蔵書が、自然と保証することになる。

読書と情報リテラシー

低学年には「図書館で鬼退治！」と、鬼の出てくるお話を探して読み、お気に入りの鬼を絵に描いてプロフィールを書き、図鑑にまとめた実践があった。図鑑の仕組みを子どもたちが考え、「鬼図鑑」の目次だてをどのようにするか話し合い、知恵を出し合った。（本校大塚健太郎教諭実践）

高学年は、自然科学・社会科学などのあらゆる分野のテーマを、専門家が子ども向けに書き下ろしていく福音館書店の月刊誌「たぐさんのふしぎ」のポスターを作成し、館内に掲示した。この時は、奥付の読み方、情報源の書誌事項の書き方、引用の仕方を教え、「その本のふしぎは何ですか」と主題を本文から引用して書きこませるようにした。

伝記を読む際には、あとで『ライブラリナビ』という五つの見出しが出てくるじゃばら折りのリーフレットに人物紹介をまとめよう」と、先にゴールを示した。ゴールを示しておけば、見出しとなる五つの観点で読むこ

とになる。目的をもって読むという経験をしてもらうのである。

ブックトークを子どもたちがするとき、決めたテーマで本を探して、何冊も読み、更に数冊に絞って、順番を考えて紹介するという営みは、課題解決をしてレポートなどにまとめるという調べ学習の読書の方法となら変わりはしない。紹介のために何度も読み返すことで、深くその作品を理解するようになる。目的をもって深く読書し、成果を共有し合うこと、それがまた次の読書につながるスパイラルな営みとなる。

いつでも本を手渡せる環境

図書館の役割は「適書を、適時、その人に」手渡すことである。自由読書だろうと、目的のある読書だろうと、学校図書館は子どもたちや教員に本を提供する。そして、本の集まるその空間は、読書へのいざないと営みが常にある「出会いのひろば」なのである。

（参考ウェブサイト）

東京学芸大学学校図書館運営専門委員会（2009）『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』（2013.01.20 参照）

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/hdocs>

読みあい学習の実践



作家・梅光学院大学
文学部日本文学科教授

村中李衣むらなかりえ

一九五八年生まれ。山口県出身。児童書・一般書の作家活動を行うかたわら、梅光学院大学で教鞭も執る。一九八三年に『かむさはむにだ』（偕成社）で日本児童文学者協会新人賞を、一九八九年に『おねいちゃん』（理論社）で野間児童文芸賞を受賞。

はじめに

国語学習の場面において、「伝え合う力」をつける授業づくりの研究はさまざまに進められ、発声・発音・口形指導などの学習トレーニングや名詩・名文の暗唱をとおし、特定場面での一定の成果はあがってきている。しかし、伝える相手を意識し、自分の思いが届くように読むことや話すこととなると、指導方法も困難を極め、総合的な力としての「国語力」にはなっていないのが現状である。特に、高学年になるにつれ、自分の身体と結びつけたかたちで読んだり話したりするという機会は減っていく傾向がある。例えば、「身をよじるように」という言葉の意

味を辞典で調べ、別の表現で説明できるようになっても、「身をよじるような」感覚を言葉とともに自分の身体で認識する経験はほとんどない。表現と経験が結びつき、自身の感情が豊かに育っていくような学習のありようは、高学年にこそ工夫をもって与えられるべきだろう。

今回提案する「読みあい学習」は、絵本を一つのツールとして用い、自分の声をとおして相手への思いを届けるものである。自分のために選んでもらった物語を、選んでくれた他者の声をとおして受け止めていくという、読みの相互交流を目ざすものである。

『三びきのやぎのらがらどん』（福音館書店）で有名な絵本作家マーシャ・ブラウンは、「絵本は、目をとおして世界の愛し方を学ぶものである」と語っている。高学年にふさわしいテーマを内包した絵本を事前に準備することで、国語の授業場面でありながら学習者どうしが、互いを認め合い尊重し合うカウンスリング的な役割も担うことが期待できる。

学習計画

単元目標

- ・相手のことを考えて絵本を選ぶことができる。
- ・作品のよさが伝わるように工夫をしながら読むことができる。

- ・相手が作品をとおして自分に何を伝えようとしているのかを考えながら、読みに耳を傾けることができる。
- ・読みあいをとおして、相手や自分のよさに気づくことができる。

実施手順

①読みあいに用いる絵本の選定

今回の読みあい学習に用いる絵本は、大人が図書サービスの一環として実施する「集団読み聞かせ」のための絵本とは趣旨を異にする。特定の誰かのために児童が主体性をもって選び、声を出して読む一冊である。

三十人編成の学級であれば三十冊、三十五人編成の学級であれば、三十五冊の絵本が、読みあいに用いられるわけだが、図書館でそれだけの冊数の絵本を準備することが困難な場合は、まず、ペアになるどちらかが相手のために絵本を選び、二人でその絵本を読みあう。その後、いったん絵本を回収し、改めてペアのもう一人が読みあいの絵本を選定するようにすれば、準備する絵本は半分ですむ。参考に、三十冊の絵本リストを載せておく（後掲）。それぞれの絵本のテーマは、友情であったり、家族のありようであったり、生き物への愛であったり、言葉のリズムや美しさであったりと、さまざまである。高学年の児童が相互に自分の声をとおして伝え合うのに向

いていると考えられるもの、そして、相手に教えこまれる印象をもたないようにするため、啓蒙性が強くないもの、十五分程度で読み終わることができるものを選定のめやすとする。

活動の発展形として、用意する本を子どもたち自身で選び、「友達に紹介したい絵本」として、お勧めのポイントを書いたブックカバー作りを読みあい前に行うといった工夫もできる。

②読みあいペアづくり

一人ずつ「ごほう」や「鶏肉」と「うふ」といった食材の名前を、全員と握手しながら伝え合う。その後、自分の伝えた食材名と組み合わせると、美味しい料理になる食材名を言った者とペアになる。もちろんくじ引きなどで簡単に決めてもよいが、ペアになったことに、なにか楽しいイメージが付与される工夫を施したほうが、このあとの活動が円滑になる。

また、この読みあいをおしてどんなコミュニケーションの発展を望むかによって、例えば男女のペアや日頃話をしない者どうしのペアを作るなどの工夫も可能である。

③絵本の探偵

「絵本の探偵シート」をもとに、ペアでいろいろな質問をし、相手の答えを受け止めな



絵本選びの風景

がら、相手にどんな絵本を読んであげたらいかを考える。「絵本の探偵シート」例を以下に示す。

絵本の探偵シート(例)

探偵氏名

ペアの名前

- 1 今いちばん夢中になっていることは？
- 2 今まででいちばんうれしかったことは？
- 3 絶対にしないと心に決めていることは？
- 4 好きな色は？
- 5 好きな動物は？
- 6 十日間どこへでも行けるとしたら、どこへ行きたい？
- 7 (自由に質問をどうぞ)

④絵本選び

「絵本の探偵シート」を参考にして、展示してある絵本の中から相手に読んであげたい一冊を選ぶ。児童のペースでじっくり行えるように、授業時間外でも自由に閲覧できるようにし、読みあいを実施する時間までには、ペアの相手にはわからないように一冊を選ぶ。

⑤読みあいの実施

ペアごとに、どの場所で読みあいたいかを相談し、その場所に移動して読みあいを実施する。絵本によっては教室の窓辺で読みあうのがふさわしい場合もあれば、校庭の藤棚の下などで読みあうのがふさわしい場合もある。

読みあいは、リラックスした雰囲気で行いたい。「○○さんのために、私が選んだ絵本はこれです。」と告げたあと、二人で絵本をまん中に、並び合うようにして絵本を読み始めてもいいし、向かい合って読んでもよい。読みあいの形態は、ペアどうしで決める。

⑥読みあい成果の分かち合い

ペアでの読みあい終了後、「読みあいカード」に自分の気持ちを書いて、読みあった相手と交換する。その後、クラス全体でどのような読みあいが行われたのかを発表する。

読みあいカード(例)

○○さんに読んであげた本は『
この絵本を選んだわけは、
この絵本を読みあつてこんなことを感じたよ。
……..
○○さんが読んでくれた本は『
この絵本を読みあつてこんなことを感じたよ。』

発表例(佐藤さんと田中さんペアの場合)

「私たちが読みあいをしたのは『ぼちぼちいこか』という絵本と『かあさんのいす』という絵本です。」



読みあいの風景

『ぼちぼちいこか』を田中さんのために選んだわけは、いちばん悔しかったことについて質問した時、運動会のリレーで三組を抜かすことができなかったことだと答えてくれたので、あまり悔しがらなくてもいいよ、来年のリレー目ざしてぼちぼちいこう、と伝えたかったからです。」

「ぼくは、佐藤さんに『ぼちぼちいこか』を選んでもらって、一緒に読みあいをしたら、とてもユーモアのある絵本だったし、主人公のカバは、どんなに失敗しても諦めずに、次のおもしろいことにチャレンジしていたので、気持ちが楽になりました。ぼくも佐藤さんが言ってくれたように、ぼちぼちがんばりたいと思います。」

『「かあさんのいす」を佐藤さんのために選んだ理由は、十日間どこかへ行くとしたら、お母さんとスイスに行きたいと答えてくれたからです。この絵本にも、仕事で疲れたお母さんのことを心配している優しい女の子が出てくるので、家族思いの佐藤さんにぴったりだと思って選びました。」

「田中さんに『かあさんのいす』を選んでもらって、一緒に読みあいをしたら、なんだか泣きそうな気持ちがありました。悲しかったからではありません。疲れていても、家が火事になってしまっても、みんなが思いやりを

もって助け合う姿が、とっても素敵だったからです。」

ペアごとの発表を聞くことで、学級全体が温かい気持ちを交わし合っていくことを実感できる。日頃ほとんど口をきかない男女のペアや、交流の少ない者どうしがペアになった場合、この「相手のために」という思いを渡し合うことが、新たな関係づくりの契機となりうる。



読みあいカードの記入



読みあい成果の分かち合い風景

配当時間

絵本の選定は、事前に行っておくこととし、②のペアづくりと③の絵本の探偵とで四十五分。④の絵本選びは、授業時間外の時間を用いる。⑤の読みあいの実施で四十五分。⑥の読みあい成果の分かち合いで四十五分。計授業三回分がめやす。先に記したように準備できる絵本の冊数が少ない場合は、⑤と⑥を四十五分で実施し、いったん絵本を回収して絵本選びを行い、再び⑤と⑥を四十五分で実施することも可能である。

なぜ高学年で絵本なのか？

学校で絵本の読みあいを実施するために、事前学習を行うと、必ずといっていいほど、現場の先生から「なぜ、絵本でなくてはならないのですか。高学年にふさわしい児童文学作品を並べて、その中から『あなたにこの本をお勧めしたい』という、いわゆるブックトークを行ったほうが、学習効果があるのではありませんか。」という質問を受ける。質問の意図はよくわかるのだが、読みあいにおいては、「共に同じ物語の時空を生きる」体験が最も重視される。その意味で、絵本が最もふさわしいのである。ペアのどちらかは声を出し、もう一方は、その声に耳を傾けながら、二人一緒に、物語世界に心を浸す。二人でタイミングを合わせ、ページをめくる。自分の一方的なペースでは成り立たないこの魂の共同作業がとても大切なのだ。

また、高学年にもなると「あなたのために」という親や教師からの思い入れが重くのしかかり、お仕着せのように感じられて、反発することも日常の中では少なくない。しかし、本来「誰かのために」という思いは、自分と他者をつなぎ、しよせん一人では生きられない人間の奥深い孤独を慰めるものだ。そのことを、思春期の入り口にさしかかった児童に、

絵本の読みあい体験をとおして感じとってもらいたい。

読みあい学習の応用

学級内での読みあいにとどまらず、異学年との読みあい活動や、家族または地域のかたがたとの読みあいによって交流を深めることにも応用できる。

○異学年との読みあいの例

縦割り活動を行っている班ごとに、上級生が下級生に絵本を選び読んであげる。

その際、「読みあいカード」を活用し、自分がどんな気持ちでその本を選んだのかわかるようにしておく。また、読んでもらった下級生たちも、どんな気持ちになったかをカードに記入し、職員室の前などに両方のカードを掲示することで、お互いの心を理解し合うきっかけとすることができ。

○家族との読みあいの例

親子読書のかたちを発展させ、子どもが家族のために図書館から一冊の絵本を選んで持ち帰り、読んであげる。親のほうも、子どもが小さかった頃繰り返し読んだ本や、自分子どもの頃好きだった本、教科書に出てくるお話の原本などの中から一冊を選び、子どもに読んであげる。その後、本の内容にこだわらず、親子で読みあった時の自分の気持ちや

相手の様子などを「読みあいカード」に記し、それを交換して、自由に話し合う。

○地域での読みあいの例

地域の老人ホームなどを訪問する際、不特定多数のお年寄りに向けて絵本を読み聞かせるのではなく、それぞれの施設利用者と言葉を交わし合い、「このおじいちゃんには、どんな絵本を選んだら喜んでもらえるだろうか。」と考えながら絵本を選ぶ。そして、出会った相手の心に届くように、なるべく一対一で、絵本を読む。施設の中では「みなさん」に向けての平等なサービスが中心で、「あなたに」「あなただからこそ」の密な交流が希薄なため、貴重な試みとなる。

期待される効果

声を出して読む側と相手の声に耳を傾ける側との相互交流が、国語学習のみでなく、学級づくりにも効果を及ぼす。そういう観点から、ペアや選書の仕方を変えて継続して読みあい活動を行い、児童や学級の変容を見ていくことも考えられる。

また、読みあいという学校図書館における新たな活用方法によって、高学年向け絵本の補充や、児童たちによるお勧め本の紹介、キャッチコピーやブックカバー作りなどといった図書館整備や充実が図られるだろう。

〈読みあい学習用絵本リスト〉

ぼちぼちいこか
めっきらもつきらどおんどん
くさいろのマフラー
じごくのそうべえ
いつもちこくのおとこのこ
パパが宇宙をみせてくれた
ぶたばあちゃん
ぼんさいじいさま
みんなおなじでもみんなちがう
パパはジョニーっていうんだ
ふくろうくん
ともだちや
はるかぜのたいこ
かたあしだちょうのエルフ
おりこうねこ

(マイク＝セイラー)
(長谷川摂子)
(後藤竜二)
(田島征彦)
(ジョン＝パーニンガム)
(ウルフ＝スタルク)
(マーガレット＝ワイルド)
(木葉井悦子)
(奥井一満)
(ボー＝R＝ホルムベルイ)
(アーノルド＝ローベル)
(内田麟太郎)
(安房直子)
(おのきがく)
(ピーター＝コリントン)

ゆうだち
にんぎょうしばい
アンナの赤いオーバー
かあさんのいす
アリからみると
ホームランを打ったことのない君に
のにつき——野日記——
きみなんかだいきらいさ
あくたれラルフ
うんこ日記
いわしくん
さっちゃんのまほうのて
ぜつぼうの濁点
くうき
まつげの海のひこうせん

(あきびんご)
(エズラ＝ジャック＝キーツ)
(ハリエット＝ジューフェルト)
(ペラ＝B＝ウィリアムズ)
(桑原隆一)
(長谷川集平)
(近藤薫子)
(ジャニス＝メイ＝ユードリー)
(ジャック＝ガントス)
(村中李衣)
(菅原たくや)
(たばたせいいち)
(原田宗典)
(まど・みちお)
(山下明生)

一年生における書字活動と文字環境の大切さ

徳島市加茂名南小学校教諭

多田 三津子

はじめに

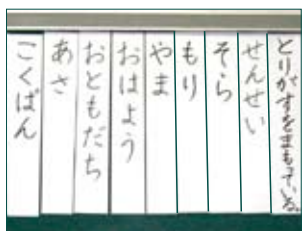
四月、子どもたちは目をキラキラ輝かせて入学してくる。子どもたちは「早く勉強したい」「文字を読みたい」「書きたい」という意欲を強くもっている。文字が読めることの喜びは大きく、知らない文字を見つけると「先生、これなんて読むの。」とよく聞いてくる。しかし、読めるからといってすべて正しく書けるわけではない。子どもたちにとって、読めない文字を書くことは興味がもてず、楽しくないと感じる。

そこで、書字活動に入る前に文字環境を整え、読むことから始めている。子どもたちが入学して初めて目にする文字は、机に貼ってある自分の名前や友達の名前である。まず、友達の名前が読めることから始め、学校で生活するために必要な言葉と物を対応させたり、読みの指導をしたりして、読むことが楽しいと感じられるようにしている。そうすることで、子どもたちが文字に親しみ、楽しんで文字を読み、すすんで書きたいという気持ちにつながっていくことができるという思いで取り組んでいる。

文字環境を整える

文字を目にする場を意識的に多くすることが、文字習得のきっかけとなる。また、自分が発表した言葉が掲示されることで、次も発表しようという意欲につながる。

① 教室にある物の名前をカードに書いて具
体物の横に貼る。



② 授業中の子どもの発言をカードに書いて
黒板に貼る。

③ 子どもたちの名前をマグネットシートに書いて、
机のスクールの部分に貼っておく。(書
写の時間に自分のめあて決定する際や、当
番活動での掲示に利用)

④ マグネットシートの表に平仮名の五十音、
裏に片仮名の五十音を書いたものを、戸棚
のスクール部分に貼り、自由に言葉遊びが
できるようにする。



⑤ 牛乳パックを使って立方体を作り、それ
ぞれの面に平仮名を書く。さいころのよう
に振って、出できた平仮名で言葉集めをす
る。自由に遊べるようにする。

文字指導に入る前に、三つの約束

正しい鉛筆の持ち方と姿勢で文字を書くこ
とは、すべての学習の基本となる。そのため
に、一年生の入門期にきちんと指導する必要
がある。そこで、書くための三つの約束をし
ている。

① 姿勢の合い言葉

正しい鉛筆の持ち方と姿勢図は、子どもた
ちがよく見える所に掲示し、文字を書く前

に合い言葉を唱えながら姿勢を確認する。

② 鉛筆の持ち方

親指と人さし指で鉛筆を挟んで、中指で鉛筆を支えるよう指導する。

③ おへそシール

姿勢を正しくするために「おへそシール」(金シール)を机の中心に貼る。自分のおへそと机の中心が合うようにするためである。



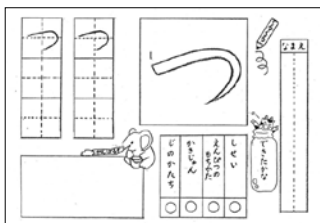
平仮名指導における工夫

① 指体操

筆圧を強くするために、指体操をする。

② 運筆練習

その日に学習する文字で運筆練習(籠書きの文字の中をくるくる書く)をする。運筆練習は、書くための三つの約束を定着させ、手をスムーズに動かすための大切な活動である。



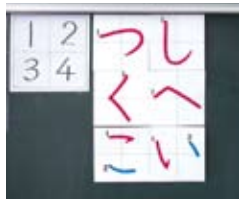
③ 画数の少ない文字から

私の名前「みつこ」の中で画数の一番少ない

「つ」を例に、「画数」という言葉を教える。「つ」から書き始め、「し」「く」「へ」と進み、習った文字を黒板に貼っていく。子どもたちは、明日習う文字を楽しみにしている。「の」「め」「ぬ」と、よく似た文字を続けて練習していくと、字形も整いやすい。また、習った文字を掲示しておくことで、文字の原理・原則を発見する力(文字を見る力)が自然と身についていく。

④ 四つの部屋

字形の整った文字を書くためには、始筆の位置が大切である。一つのます目を四分割し、四つの部屋に例えた場合、どの部屋から始まり、どの部屋を通して、どの部屋で終わるか意識させる。



⑤ イメージを大切に

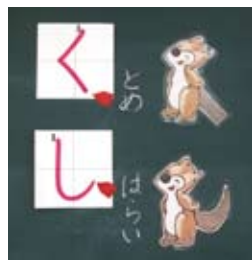
文字を正しく整えて書くためには、終筆の形が大切である。例えば「むすび」であれば「おむすびの



「むすび君」

ような形」「スプーンのような形」等、「むすび」の形をイメージで捉え、しつかり意識できるようにする。「むすび君」などの

キャラクターを登場させると、楽しみながら定着を図れる。また、書き方を身につけるために、砂文字コーナー・水書用紙等を用意すると効果である。



砂文字コーナー

おわりに

入学して間もない子どもたちは、文字環境を整えると、遊びを通してすんで文字を読もうとする。やがて平仮名が十分読めない子どもたちも文字に興味をもち、平仮名が読めるようになってくる。そして、読める文字が増えてくるにつれて、書きたいという気持ちも強くなってくる。このように、「読むこと」「書くこと」は切り離しては考えられない。これからも「書くこと」の基礎・基本を大切にしながら、文字環境を整え、文字を大切に、自分の文字に自信をもち、「書くこと」が好きな子どもたちを育ててきたい。

鈕持 勉 著



バランスのよい文字が書けない……
文字の大きさがばらばらだ……
書くのに時間がかかる……
どうしても行が曲がってしまう……

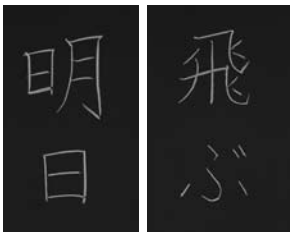
そんな板書の悩みを解決する
15の板書技術を公開します！

Figure 1 displays four examples of handwritten Japanese characters, specifically 'シ' (shi) and 'ツ' (tsu), arranged in a 2x2 grid. The top row shows the characters in a standard, slightly slanted upright orientation. The bottom row shows the characters rotated 90 degrees clockwise. The left column contains the character 'シ', and the right column contains the character 'ツ'. Each character is drawn with a single, continuous, slightly irregular stroke, characteristic of handwritten text. The background is black, and the characters are white.

たとえば……「正しいチョコの持ち方」！



たとえば……「文字の大きさ」！



漢字とひらがなを合わせた「飛ぶ」は、「飛」を大きめに書く。

漢字と漢字とで構成される言葉では、画数の少ない漢字を小さめに書く。「明日」の「日」は、「明」にも「ひへん」として含まれているので、それも考慮に入れてバランスを考える。

目次

第Ⅰ章 板書の機能・板書の日常化

- 1 板書がなぜ求められるのか
- 2 板書の機能を授業で生かす
- 3 教員養成における板書技術の指導
- 4 新たな板書の果たす役割
- 5 児童・生徒の板書に対する期待
- 6 大学生の板書に対する期待

第Ⅱ章 読みやすい文字を書く

- 技術1 漢字を書くコツ
- 技術2 ひらがなを書くコツ
- 技術3 カタカナを書くコツ

第Ⅲ章 板書の基礎・基本

- 技術4 チョークの持ち方
- 技術5 教師の立つ位置
- 技術6 行取りの工夫
- 技術7 文字の大きさ
- 技術8 曲がらないコツ
- 技術9 色チョークの使い方

第Ⅳ章 授業をグレードアップするための技術

- 技術10 速く書くコツ
- 技術11 黒板の広さを理解して書く
- 技術12 児童に書かせるコツ
- 技術13 横書きのコツ
- 技術14 板書計画に合わせて書く
- 技術15 練習の日常化



「どうすれば文字を整えて書くことができるか」
「曲がらないで書くにはどうするのがいいのか」

本書では、そうした多くの声に少しでも応えたい。そして、板書に
対するこれまでの自分の姿を振り返り、児童・生徒の前で自信をもつ
て臨むためのコツを提示して、指導技術の力量を高めることに貢献し
たい。(中略)「先生の文字は整っていて見やすい」、「先生の文字は筆
順がわかりやすい」、「さすが先生だね!」という声が聞かれる教室が
増えることを期待するとともに、教師の基本的な力量として板書の魅
力も実感してもらいたい。

〈本書「はじめに」より〉

プロの板書

鈿持 勉 著

ISBN978-4-316-80375-3

B5 判 100 ページ

2013 年 4 月発行

1,470 円 (本体 1,400 円+税)



第11回

地球となかよしメッセージ

作品募集(2013年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。



2012
入選作品

信友

運動会で私たち6年は、組体操をやりました。
その中の2人技、「サボテン」は雨のせいでグラウンド
がベチョベチョだったので、やりにくく失敗する人たちが
たくさんいました。
私の場所もやりにくく、上の子が「もう落としていい
よ。」と言ってくれましたが、小学校生活最後の運動会だっ
たので、絶対成功させたくて、「大丈夫。まかせて!」と
言うと、上の子は「分かった。」と言ってくれました。
その言葉がとてもうれしくてうれしくてたまりません
でした。まるで、「信じてる。」と言ってくれているよう
でした。
そのしゅん間、「サボテン」は成功しました。

応募資格

小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

応募期間

2013年7月1日～9月30日
詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

作品
テーマ

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境
や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交
流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会

◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

小学国語通信 ことばだより〔2013年 春号〕 2013年3月29日 発行

編集:教育出版株式会社編集局

発行:教育出版株式会社 代表者:小林一光

印刷:大日本印刷株式会社

発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技
術の進展や国際化、情報化、高齢化などによっ
て、今、大きく変わろうとしています。このよ
うな社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆ
る命がのびのびと生きていくためには、人や自
然を大切にしながら、共に生きていこうとする
優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」
というコンセプトワードに込め、社会のさまざ
まな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社

〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509

函館営業所

〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198

東北支社

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395

中部支社

〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825

関西支社

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401

中国支社

〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040

四国支社

〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134

九州支社

〒812-0007 福岡市博多区東比恵 2-11-30 クレセント東福岡 E 室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140

沖縄営業所

〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411